
蒼島一家の物語

らいち2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼島一家の物語

【Nコード】

N1018Y

【作者名】

らいち2

【あらすじ】

（これは前作なんでも屋の日常〜面倒事編〜の続編です。もし、見ていない人は見ておくことをおすすめします。）なんでも屋を経営している蒼島竜輝とその家族。その家族はほかとは違った一面を持っていた。これは、そんな蒼島家の日常を描いた物語である。

すべてはここから始まる

さわやかな風、新鮮な空気、晴れ晴れとした空。

まさに、いいことが起きても不思議ではない天気だ。実際、俺も今朝からいいことが起きないかと期待していた。

だが、運命は俺のことが嫌いなのだろうか。いや、間違いなく嫌いなのだろう。でなければ、こんなことになるわけがないのだから。

「・・・・・・・・・・と言っわけで、今日からよろしくねお兄ちゃん」

2

「僕のことよろしくね竜輝お兄ちゃん」

もし、この場になんの事情も知らない者がいたら即俺のことを異端審問会にかけてしまうほどの美女が俺の目の前に2人いる。いや、正確には美女と男の娘がいると言ったほうがいいのだろう。

そんな2人と俺の関係はなにかと言えば、血のつながった兄弟と言えいいだろう。そして、2人は双子だ。そのせいか、弟のほうも姉と同じ容姿をしており、実際に女と間違えてもしょうがないほど

になっている。

ただ、この2人問題がある。そのせいで、誰とも付き合ったことがないどころか、見向きもしないほどである。最近になって、少しだけだが他の男性と話をするようになってきたので、少し安心してきていたりする。

その2人が抱えている問題。それは、ブラコンだ。それも重度のだ。さらに悪いのはその対象が俺だっていうことだ。どうせなら、弟の姫花のほうにすればいいのと思っていた時期もあった。ただそれだと、姫花の対象が俺に確定してしまうのでそんな考えはすぐに捨てたが。

では、どのくらいのものかと言えば、先ほども言った通り他の男性を見向きもしないほどだ。たまに、意識を向ける時もあるが、その時に言うことは決まって「あなたの存在はありません。」みたいことを平然と言ってしまう。

そして、何よりやつかいなのはヤンデレ持ちと言うことだ。まあ、これは容易に想像できた者もいるかもしれないが、何より厄介なのはその向ける対象だ。何故か俺と親しい男性に向けるのだ。ああ、ちなみに向けているのは殺気とかの悪い方な。

なぜ、女性に向けないのか竜姫に一度聞いたことがある。そしたら、「お兄ちゃん魅力があるからね。だから、他の女性と付き合うの

は別に構わないと思っっているからね。」と言われた。

俺としてはなぜそんな思考になるのか知りたいんだが。何をどうやったらそんな考えに達するのだろうか。そう考えたりもしたが、俺が理解できるわけがない。なので、そういうものと納得していた。ちなみに、姫花にも同じことを聞いたが同じような答えが返ってきた。いや、お前がそんなこと言っでどうすんだ。仮にも、お前男なんだが。

まあ2人の説明はこんなところだな。何？前作でも聞いたことがあるって？細けえことは気にすんなよ！

さて、現状を改めて確認しよう。まず、なぜこうなったのか順を追って整理してみる。最初は2人が俺の家を訪れた。その後、話があると云ってきたので、居間まで誘導しそこで話を聞くことにした。そして、話を聞いているうちに2人が俺の家に住むことが分かった。

だいたい大きくまとめるとこんなところだ。うん、どうしてこんなことになったのかよくわからない。ただ、このままだというんな意味でまずい。主に、俺の人生的な意味で。

「なので、俺は断固拒否するわけだ。だから、帰ってくれないか。」

「そんなことが聞き入られると思っっているのお兄ちゃん？」

「例えお兄ちゃんに拒否されても僕とお姉ちゃんは勝手に居座るけどね。」

「デスヨネー。」

大方予想していたことだけど、流石にこの的確に言われるとそれはそれで結構傷つくな。

「それにしても、よく親父が許可をとってくれたな。」

「それはね、お父さんにお兄ちゃんへの思いを包み隠さず話したら、『それなら引き止めることもないな。無事に暮らして、子供を作るだぞ！』って許可してくれたんだ。」

「うん、今度親父にあつたら真つ先に殺そうかな。有無を言わさずに。」

しかも、子供を作るって発言しているんだあの親父。確かに、この世界では一応認められているけど、はっきり言ってあまりいいもんではないぞ。主に、俺の人生的考えとして。ていうか、俺にはすでに子供も妻もいるのを知っているだろあの親父は。間違いなく、それを承知の上で許可を出したな。

・・・・・・・・・・・・・・・・一生苦しみを与え続けるようにしようかな。

ああ、そういうやつ言い忘れてた。さっき竜姫はお父さんと言っていたが、あくまで自分の父と言うことは認めているが、男性としては認めていない。まあ、親父はそんなこと別に気にしていないけどな。

まあ、そんなこんなで結局2人が俺の家に住むことが決まっていたというわけだ。はつきり言っておりがたくない。

さて、俺はいつまで無事でいられるのか。それはこの先の物語を見ていけばわかると思う。

そして、ここから俺、蒼島竜輝のさらに増した前途多難な生活が幕を開いたのだった。

できれば、嫌なことが起きませんように。この時、そう願っていた俺であった。

人物紹介1

蒼島 竜輝 (そうじま りゅうき) 男

主人公。なんでも屋を経営し、妻の紅花と娘の竜花の3人で生活をしている。性格は、めんどくさがりやで、少しいい加減。しかし、やるときはちゃんとやる。他人の不幸や他人を傷つけることを喜ぶ一面を持っているが、根本的にはいい人。本人は自覚はないが顔はイケてる方。少し前までは、BL疑惑が悩みの種だった。最近の悩みは妹と弟が家に居候してきたこと。

蒼島 紅花 (そうじま こうか) 女

竜輝の妻。夫の竜輝とは幼馴染であった。昔は竜輝にトラブルメーカーと呼ばれるほど騒ぎの中心的存在みたいなものであったが、結婚してからはおとなしくなった。周りからは人柄がよくなったとの評判。竜輝のことをよく知っており、彼が重婚してもよいと思っている。そのため、竜姫や姫花の入居を認めている。旧姓は赤夜^{せきよ}。

蒼島 竜花 (そうじま りゅうか) 女

竜輝と紅花の娘。人懐っこく、物わかりがよい。そのためか、一部の者には少し苦手意識を持たれている。竜姫と姫花と一緒に生活することには認めている模様。ちなみに、年齢は10歳。

蒼島 竜姫（そうじま りゅうき） 女

竜輝の妹であり、姫花の双子の姉である。兄のことが大好きであり、既成事実を作りたいほど。兄以外の男性を認めておらず、存在がないものだと思っている。だが、最近少しいだが、改善されてはいる。弟の姫花と一緒に竜輝の家にやってきた。名前の読みが兄と同じで嬉しいらしい。もっとも、その兄はまぎわらしいものと思っているが。

蒼島 姫花（そうじま ひめか） 男

竜輝の弟で、姫花の双子の弟である。容姿や性格は姉と一緒にあり、そのため今回のことはかなり嬉しい模様。過去に、竜輝の初めてを奪おうとしたこともあったので、竜輝からは苦手意識を持たれている。が、本人はあまり気にしていない模様。むしろ、自分に意識が向けられることがうれしいようだ。うん、病院行け。

黒鷹（くろたか） 男

竜輝の親友の一人。暇なときがあればよく竜輝のところにくる。そして、よく竜輝にからかわれる。独身だが、本人は気にしていない模様。最近体が鈍ってきたので家や闘技場などの場所で鍛えている真っ最中。そのため、今回のことはまだ知らない。

蒼島 幻（そうじま げん） 男

今回の出来事を引き起こした張本人でもあり、竜輝たちの父親でもある。子供たちのことを溺愛している。そのため、姫花と竜姫が竜輝のところに入居することや結婚することすら認めている。そのせいで、竜輝からは少し嫌われているが、本人はいたって気にしていない。少しは気にしろ。なお、子供の名前を決めたのは彼であり、『兄弟で同じ字が入った方がいい』と考えていた。そのため、3人の名前には他の兄弟に使われている字が一緒に入っている。その結果、竜輝と竜姫のように同じ読みになってしまった。

蒼島 蒼馬（そうじま そうま） 女

一見男っぽい名前をしているが、れっきとした女性であり、幻の妻である。今回の夫の行動には賛成しているようで、竜姫と姫花には頑張ってほしいと心から応援している。うん、この両親ダメだ。何とかする前にもう手遅れだ。ちなみに、夫と同様、子供たちを溺愛しており、特に竜輝と出会ったと激しいスキンシップを試みるほど。そのため、竜輝からは苦手意識を持たれている。竜輝、がんばれ。

急展開にもほどがある（前書き）

書き方を少し変えてみました。

急展開にもほどがある

「・・・・・・・・・・はあ」

「さっきからため息してばっかだけど何かあったの？」

「もしかして、お兄ちゃんをいじめるやつがいるとか？だとしたら、私がそいつを今すぐにでも消してくるよ」

「もちろん、僕もね」

「いや、決してそんなことではない。というか、いくらなんでも消すのはまずいだろ」

「いじめではないなら何なの？私には想像もつかないんだけど」

「僕もお姉ちゃんと同じ見」

「・・・・・・・・・・はあ。つくづく自覚がないってのは恐ろしいものだと思っよ」

「？自覚？誰が？何を？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そう言っただけなら言っても意味ないだろうなあ。はあああああ」

まったく、無自覚というものは本当に恐ろしいものだ。

こうやって話をしていれば少しは気づいてくれそうなものなんだけどな。

もつとも、気づいたとしてもおとなしくしていることができるとは言えないけどな。

「こんな時に黒鷹がいてくればなあ」

「黒鷹？ああ、あのお兄ちゃんにいつも近寄ってくる変質者のことね。でも、大丈夫だよお兄ちゃん。あんなのがいなくても私が代わりにいるから安心して」

「もちろん僕も一緒だよ竜輝お兄ちゃん」

「ついに黒鷹の存在が変質者になってしまったか・・・・・・・・・・」

確か前は俺に近寄ってくる飯初の友人だったな。

まあこれでもいくらかはましかな。もっとひどくなると存在がないようにされるしな。

「まあ、そんなことは別にいいか。それにいたとしても状況はあんまり変わらないよう気がするしな」

「じゃあ、もしいたとしたらどうするつもりだったの？」

「もちろん身代りにする」

「何の？」

「竜姫と姫花に襲われた時に」

「え？襲われた時に！？」

「おい、そこ。なんで驚いてんだ。どこに驚く要素があったんだ。そして、なぜそこで驚く」

「りゅ、竜輝つてもしかしてマゾだったりするの？もしそうだったら私……」

「うん、ちょっと待とうか。俺にはどうしてそんな答えが出てきたのかよくわからないんだが。なので、誰か説明してくれ」

「だって、さつき『襲われた時に』って言ってたよね。と言うことはつまり襲ってほしいと思ったからあんなことを言っただよね」

「まず、その思考回路が俺には理解できないよ！あれか、気持ちの裏返しを察したつもりか。だとしたらひとつ言わせてもらおう。180度違うわ！そんなことを俺が思っていたら大間違いだよコンチクショー！」

「……うん、そうだよね。いくらなんでもお兄ちゃんがそんなこと思うわけないよね。馬鹿だね私。そんなこと、考えて、本当に、馬鹿、だねっつ、」

「お、お姉ちゃん泣かないでよ。お姉ちゃんが泣いちゃうと僕もつらくなってしまうから、お願いだから泣かないでよ。お願いだから泣かないでよお、」

そう言つと、姫花も泣き出した。

え？あれ？これって俺が悪いの？俺そんなにひどいこと言った？

「竜姫義姉さん泣かないでください。姫花義兄さんも連れて泣かないでください」

「うん、ごめんね紅花ちゃん。こんなじゃ私義姉として失格だね。義妹に慰められているようじゃお兄ちゃんと一緒になるなんて夢のまた夢だよ」

「やっぱり一緒になるなんて無理だったのかな。こんなで泣くようじゃ私・・・」

「そう卑屈にならないでください！それにお二人が悪いとはだれも言っていないじゃないですか！」

あれ？なんだろう、嫌な予感がする。

そう思っていたら紅花がこっちに振り向いた。

「竜輝！！突っ立てる暇があったら2人に謝ってよ！元はと言えば

竜輝が悪いんだからさ!」

ああ、やっぱりこうなるのね。だいたい予想できていたけど流石にこつも的中してしまうとあまりいい気持ちもしないものだな。

できれば外れて欲しかったな。その方が何かといいし。

「とりあえず少し待とうか。何で俺が悪いことになっているのか詳しく聞きたいんだが」

「自分で言っておいて悪びれないなんて本当に竜輝って最低だね。見損なつたよ!」

「あの紅花さん?人の話を聞いていますか?」

「.....わかつたよ。そつちがその気なら私にも考えがある」

そつ言うや否や紅花は部屋を出て行った。

部屋に残ったのは、まだ少し泣いている竜姫と姫花、何がどうなっているのかわからず茫然としている俺の3人だけだった。

竜花は友達の家遊びに行っているため家にはいない。

ほんと何でこうなったんだろな。確か俺が『襲ってほしい』という気持ちはないと言った時からこうなったんだよな。

そうなると思いますわからん。何故そんなことで泣き出したのか。

まあ別にいいか。竜姫達がこんな風になるのは今回が初めてではないしな。

そんなことを考えていたら、紅花が部屋に帰ってきた。大きな荷物をその手に持って。

.....ものすごく嫌な予感しかないんだが。

「竜輝が素直に謝る気がないなら私は実家に帰る！」

「うん、とりあえず落ち着け。お前が行ったら竜花はどうなるのかわかって言っているのか？」

「そうやって私を引き止めようとしても無駄だよ。それと竜花も一緒に連れて行くから問題ないよ」

「いやいやいや、そんなに俺が納得できるわけないだろ。第一、竜花はこのことを知らないだろ」

「さっき竜花に事情を話したら『うん、わかった！』ってあっさりと納得してくれたよ」

「神は死んだ！というか、もはや神は死んだってレベルじゃねーよこれ！存在が消されたレベルだよ！」

まさか実の娘にすら見捨てられるとは思わなかったよ！え、何？みんなして俺のことをいじめたいの？

俺そんなに悪いことした！？

「と言うわけで、竜輝がちゃんと2人に謝らない限り私はこの家に帰るつもりはないから」

そう言って紅花は部屋を出ていき、玄関に向かって行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・もう何がな
んなのかわからん」

流石にここまで来ると冗談とか言える雰囲気じゃないな。

仕方ない。ここは潔く謝るとするか。

「竜姫、姫花。その、すま」ごめん、言い忘れたことがいくつかあ
った」

謝ろうとした途中に紅花が戻ってきた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何故だ。先ほどよりも嫌な予
感がするんだが。

というか、さつきから嫌な予感しかなくて悲しすぎる。良い予感が
してもいい気がするんだが。

「ただ謝るだけではなく、ちゃんと心の底から謝罪するように。そ
れができたなら今度は2人のことを認めてあげること。念のために言
っておくけど、2人の好意のことを言っているだからくれぐれも勘
違いしないように。そして認めてあげたらちゃんと返事をあげるこ
と。できればいいものでお願いね。まあ、流石にそれは竜輝が考え

ピシヤツ

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！？

「な、なんだとおおおおおおおおおお！
！！！！！」

これは流石に予想できたなかった。流石は紅花と言ったところだろうか。

って、重要なのはそんなところじゃない！！

つ、つまり、前の生活に戻るには竜姫と姫花にただ謝るだけではなく、2人の好意を認めた上で、返事を出せってのか！？

『それなら返事を出すときにやっぱり好きにはなれないって言えばよくね？』と大抵の者はそう思うだろう。

しかし、そんなことをしても無意味だ。何故なら、その返事はもう昔に出しているからだ。それも、好意をちゃんと認めた上で。

だが結果は現在の状況を見ればわかるだろう。そう、つまりこの現状を打開するには2人のことを好きだと言わなければならぬ。

いや、言うだけでダメだ。紅花もそのことはわかっているはずだ。だから、あえて言わなかったのだろう。ありがたくはないし感謝の気持ちもないけどな。

はつきり言ってしまうば、俺は2人のことを好きにならなければいけない。それが前の生活に戻るための唯一の方法だ。他の方法は恐らくないだろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・はつきり言っていていいか？これなんて詰みゲー？

何で『襲ってほしい』と言う気持ちがないと否定しただけでこうなっただ？考えても全然答えが出ないんだけど。

そして、1つ言っていていいだろうか。

「Help me 黑鷹！」

そのころの黒鷹

「いやゝ久しぶりにいい汗かいたなゝ。やっぱ運動は大切だな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1018y/>

蒼島一家の物語

2011年11月15日11時06分発行